

自立活動だより

令和5年度

令和5年10月4日発行

佐世保特別支援学校 自立活動部



今回の自立活動だよりでは、夏休み期間中に本校で実施した外部専門家による研修会のうち大学教授で心理がご専門の柳智盛先生と言語聴覚士の江頭聡子先生の講義の内容とあご高等部3年生の自立活動の様子を紹介します。

I： 外部専門家活用事業による研修報告

講師 長崎国際大学教授 柳 智盛氏

「自己肯定感を高めるための指導・支援について」

1 自己肯定感を育む二つの側面

①自らの力の向上に向けて努力することで得られる達成感や他者からの評価等を通じて育まれる自己肯定感

「テストに向けて勉強したから良い点が取れてうれしい」

「運動会の100m走で1位になって先生に褒められた」

②自らのアイデンティティ（本質）に目を向け、自分の長所のみならず短所を含めた自分らしさや個性を冷静に受け止めることで身に付けられる自己肯定感

「自分は、運動は苦手だけど、絵を描くのは得意だ」

2 自己肯定感の成長を阻害している発達障害を有する子どもの特性

- ・本人の頑張りに関係なく、障害特性による失敗体験
- ・新規場面、新しいことへのチャレンジすることへの難しさ
- ・対人関係（社会性）の困難さによる、自分の意思表示の難しさ
- ・障害特性による、自己認識形成の難しさ



3 「自己肯定感」を高める指導

①「認められている」と感じるような関わり方

⇒児童生徒に寄り添い、話をよく聞く。

②「褒められている」と感じるような関わり方

⇒結果だけでなく、結果に至るまでの過程での努力する姿勢を褒める。

③「成功したことに目を向けられる」と感じるような関わり方

⇒頑張りや努力を評価。失敗しても、またやってみようと思うような気持ちを育てる。

④「性格・人格を傷つけない」と感じるような関わり方

⇒感情的に指導しない。誰かと比較して指導しない。



4 発達障害を有する児童生徒への指導

①「障害特性」に合わせた褒めるポイントを考える

⇒児童生徒の障害特性に合わせた目標を明確化

②「その場で褒める」

③「こまめに実感が伴うように褒める」

⇒一つの行動に対して2回以上褒める



Ⅱ：外部専門家活用事業による研修報告

講師 医療法人雄人会 三川内病院 児童デイサービスみかわち 江頭 聡子氏

「言語の理解と表出の促進」について

(言語聴覚士、公認心理師)

1 言語の理解と表出の促進

発話するためには、音声システム（蓄積した意味データから話したい言葉を引き出す）にたくさんの言葉を蓄えないと話せない

→
たくさんの語彙をインプットさせる必要がある。

【インプットの方法（耳だけでなく目も使う）】

得意なルートを利用して意味システムに語彙を蓄えさせよう！

実物や絵を見せながら言語刺激を入れる



実物や絵を見せながら文字を見せる



実物や絵を見せながらマカトンや手話を見せる



PECSを使って要求させ、言語刺激と共に要求を満たす



【マカトン】

- ・サインと発語を同時に提示することで「理解」「言葉での表出」「サインでの表出」が規定できる。
- ・シンボルを使用することで、文字が読めなくても記載されていることが理解しやすい。

【PECS (picture exchange communication system)】

- ・絵カードや写真などの視覚的なコミュニケーションツールを使用。
- ・相手にカードを渡すことで、要求したり、伝えたりする。
- ・コミュニケーションの自主性や相互作用を促進。

2 コミュニケーションと姿勢の関係

言葉の表出

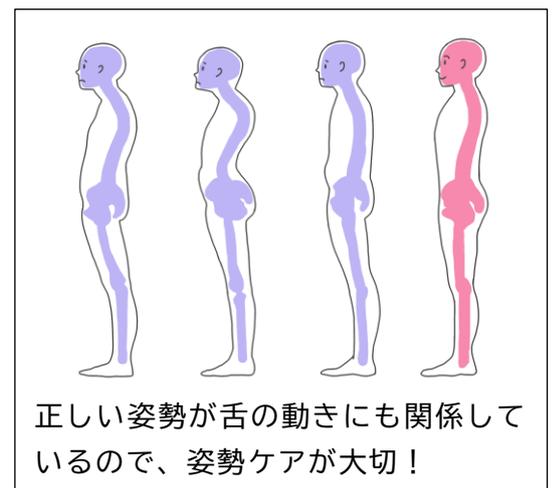


舌の左右の動きが重要



舌を動かすには体幹の安定が必要

舌骨は宙に浮いているため、周りの筋肉に支えられている。舌骨につながっている胸骨舌骨筋や肩甲舌骨筋は肩甲骨に繋がっている。そのため、骨盤を起こして背骨のS字カーブを保っておかないと舌はうまく動かない。



Ⅲ：知的障害教育部門高等部3年生の自立活動の様子

知的障害教育部門(あたご部門)高等部3年生25名は、自立活動の時間における指導を5つのグループに分けて毎週火曜日の5時間目に実施しています。グループの編成は、個々の目標を基に課題克服に向けたアプローチ方法が近い生徒同士をグルーピングしています。その内3つのグループの様子を紹介します。

主として「他者に自分の考えを工夫して伝えること」を目標とした学習に取り組むグループ

生徒の課題	他者に自分の気持ちや考えを適切に伝えることに課題がある。	
目標	必要に応じて伝え方を工夫して自分の考えや意見を適切に伝えることができる。	
指導内容や指導方法、手立てなど	活動の始めにアイスブレイクゲームなどを行い、話しやすい雰囲気を作る。話し合い活動や伝言ゲームなどを通して、自分の考えや伝えたいことを工夫して伝えることに挑戦させ、伝えることに慣れ、成功体験を重ねさせる。	
変容	小集団の中で、ゲームを取り入れた活動に取り組むことで楽しみながら伝えることに慣れ、少しずつ自分の意見を工夫して伝えることができるようになってきた。	

主として「自己理解を深め、選択肢から選ぶなどして答えたり気持ちを伝えたりすることができる」ことを目標とした学習に取り組むグループ

生徒の課題	自分の苦手なことを理解して、必要な支援を求めることに課題がある。	
目標	分からないことについて質問したり、支援が必要なことについて依頼したりすることができる。	
指導内容や指導方法、手立てなど	軽作業などに取り組む中で、決まった流れや方法に沿って必要な支援を依頼したり、質問したりすることに慣れさせる。	
変容	質問や依頼の仕方を伝えて、実践を繰り返すことで、少しずつ慣れ、自分からの発信が見られるようになってきた。	

主として「学習に集中して取り組み、自分で出来ることを増やす」ことを目標とした学習に取り組むグループ

生徒の課題	一定時間落ち着いて学習に取り組んだり、適切な表現方法で他者に気持ちを伝えたりすることに課題がある。	
目標	一定時間集中し、落ち着いて活動に取り組む、自分で出来ることを増やす。	
指導内容や指導方法、手立てなど	軽作業やゲーム、軽い運動を通して、手指の巧緻性を高め、落ち着いて活動に取り組むことができることを目指す。意欲的に活動に取り組むことができるよう、時間や取組内容を工夫する。	
変容	活動の内容を理解するまでに時間を要したが、内容を理解することができると、意欲的に取り組むことができるようになってきた。	

